

はじめに

Don't be afraid to talk about spirit! (Bob Sam)

私は大学教員として、ここ20年程トランスパーソナル心理学という分野の研究に携わってきました。このあまり聞き慣れない学問を思いつ切り簡単に一言で説明するならば、霊性を研究の中心に据えながら「人の生きる意味を問う」、という壮大なテーマを掲げた学問領域ということになります。もちろん私などは、その領域の一端のまた一端を僅かわずかに垣間見た、という程度にしか「この問いに対する答え」を理解しておりません。しかし昨今の日本の、あるいは世界の情勢をみるにつけ、「この問いに対する答え」が今求められているのだ、という思いを強くしています。本書では、今まで私が学んできたこと、そして先人たちの教えを参照しながら、現代社会における霊性の在り方について考えてみたいと思います。

これを書いている2021年2月現在、世界はコロナウイルスの影響で大きな混乱、動揺の

中にあります。私自身も、かつて経験のない大きな戸惑いの中にあります。10年前の東日本大震災の時も日本は大きな困難に直面しました。もちろんそれは他人事で済まされない大きな衝撃だったわけですが、それでもあの時私は直接の被災者ではありませんでした。しかし、このコロナ禍は違います。世界中の全ての人に感染の可能性があり、大きな恐怖の下にあります。それは、ある意味人為的に作られた恐怖なのですが、ともあれ私自身も大きな影響を受けました。自分が関係するイベントは次々と中止になり、勤務する大学は昨年、卒業式も入学式もできませんでした。昨年(2020年)予定されていた世界的なイベント、東京オリンピックも延期されました。果たして今年、できるのかどうか。国を越えての人々の移動は制限され、世界経済はリーマンショック以上の大打撃を受けたと言われます。世界中に失業者が増え、日本もその例外ではありません。私は戦争を知らない世代ですが、まるで見えない敵との戦争が始まったような気分です。世界は今、先行きの見えない混乱の中にあります。

では、コロナ禍が始まる以前の世界はどんな状況だったでしょうか。そこにあったのは、音を立てて大きく変わりゆく地球の姿でした。極端な気候変動と甚大な自然災害。世界中の富の半分以上を人口のわずか1%の富豪が握るといふ、貧富の二極化。自国第一主義が助長する国際社会の分断。政治や宗教と連動した地域紛争、そしてテロ。AIの台頭による人間疎外……

などなど問題を挙げ出したら切りがありません。このような問題を生んでいるのは、「物質的繁栄こそが幸せ」であると勘違いした拝金主義的な価値観でしょう。この価値観こそが自然の生態系を無視した開発を促進し、結果、世界各地に深刻な自然環境破壊をもたらし、それは気候変動や自然災害として私たちの生活を脅かしているのです。そして人々は、薄々そのことに気付き始めたように思います。しかし、体に染みついた既存の価値観から抜け出すのは、そう簡単なことではありません。そこにもたらされたものこそ、今回のコロナ禍だと思っております。この騒動の発生原因には、色々な見方があります。起こっている事態を冷静に見つめると、自然発生的に起きている現象としては説明がつかない部分も確かにあります。つまり報道されている事実の背後に潜む、人為的、作意的な意図の存在です。その辺りのことに関しては、第五章で改めて述べたいと思います。しかし発生源が何であったにせよ、結果的にこのコロナウイルス騒動は、地球が発している私たち人類へのメッセーシジになっていると思うのです。では、そのメッセーシジとは何か。それは一言で言えば、「靈性の時代に立ち返れ」という啓示です。物質主義的な価値観を見直し、靈性を基本とした利他の精神に立ち返れ、という天の声です。ガイア理論という考え方があります。イギリスの生物物理学者ジェームズ・ラブロックの唱える学説です。簡単に説明すると、「地球そのものが一つの生命体で意志をもって生きている」

とする考え方で、地球環境問題を考える上で、とても重要な発想の一つです。この発想でちよつと視点を変えてみると、人間にとつては恐ろしい現実も見えてきます。人類が現在のまま、全体の調和を考えず地球に負荷をかけ続けるのなら、生き物である人間が自分の中の癌細胞を破壊しようとするように、生き物である地球は、この惑星で最も有害な存在、すなわち人類を駆逐しようとするかも知れません。近年地球規模で問題になっている深刻な自然災害などは、こんな地球の営みと関わりがあるのではないかと思えるのです。そして今回のコロナウイルスの問題も、その一つだと思ふのです。考えすぎでしょうか。

縄文時代の人々は豊かな靈性のもとに暮らし、大きな争いごとの無い社会を何千年も維持したと言われます。現代の我々に縄文の暮らしはもちろん出来ません。しかし、一人一人が靈性を磨き、価値観を再考することは可能だと思ふのです。地球全体の調和を無視した人間中心主義的な振る舞いを改め、生命中心主義的な生活にシフトして行くことこそ、今私たちに求められているのだと思います。そして、それこそが結果的に私たちを幸せに導くことになるのです。

映画「ガイアシンフォニー地球交響曲」を撮った龍村仁監督は、次のようなメッセージを私たちに投げかけます。

かつて人が、花や樹や鳥たちと本当に話ができた時代がありました。その頃、人は自分

たちの命が、宇宙の大きな命の一部であることを誰もが知っていました。太陽を敬い、月を崇め、風に問たずね、火に祈り、水に癒され、土と共に笑うことが本当に生き生きとできたのです。ところが最近の科学技術のめまぐるしい進歩とともに、人はいつの間にか、『自分が地球の主人であり、自然は自分たちのために利用するもの』と考えるようになってきました。その頃から人は、花や樹や鳥たちと話す言葉を急速に忘れ始めたのです。人はそのまま自然と語り合う言葉を、永遠に忘れてしまうのでしょうか。それとも科学の進歩と調和しながら、もう一度、その言葉を思い出すことができるのでしょうか。

(映画「地球交響曲」)

地球上の全ての存在は、人間の為に存在しているわけではありません。花も樹も鳥も、そして岩や水や風さえも全ては意思をもって、全体の一部として調和の中に存在しているのです。それは人間とても同じです。この事実を思い出し、私たちが勘違いして培った物質主義的な価値観を見直し、豊かな靈性に根差した生き方に喜びを感じるるとき、私たちは再び花や樹や鳥たちと話す言葉を思い出せるのではないのでしょうか。母なる星ガイア(地球)はそんな私たちを再び優しい眼差しで抱いてくれることでしょうか。本書では、かつて私たちが宿していた豊かな

靈性を再び思い出すために、靈性と現代人の関わりについて様々な視点からご紹介したいと思います。本書の目的は、「靈性を分かり易く伝えること」です。これまでにも、多くの先人達が靈性を説明してきました。しかし真理を見極めた達人の書というのは、往々にして哲学的な表現が多く一般には分かりづらい部分がありました。ですから本書では、靈性をできるだけ平易な言葉で分かりやすく伝えたいと考えます。従って、この種の情報に通じている人、あるいはスピリチュアルな事象に詳しい方にとっては本書の内容など、良く知っている当たり前のこともかも知れません。しかし、一般の人達は意外と見えていないのです。この靈性に溢れた美しい世界が。なぜなら、多くの善良な市民はこの種の情報から切り離された世界で生きているからです。ここにこそ、大きな問題があります。

私は立教大学で30年以上に渡り教鞭をとってきましたが、その間、靈性は最も重要な学生に伝えるべきテーマでした。靈性を巡って、熱い議論を学生諸君と交わしてきました。同時に、数々の講義や講演会、学会のシンポジウムなどを通じて靈性について発信し、皆さんと議論をしてきました。一般にはあまり知られていませんが、日本にも靈性を研究テーマとする学会があり、これを真摯に研究する学者が沢山いるのです。靈性は人間存在の根幹に関わるテーマですから、これは当然と言えば当然なのです。

先日、久しぶりに大学教授時代の友人と会った時、たまたま流れで話が靈性に及びました。その時彼は、君のことは信頼するけれど話す内容に関しては受け容れ難い、という趣旨のことを言いました。彼は長年開業医をしており、地域の住民からも信頼されとても誠実な人間です。これが、多くの善良な市民の現実ではないでしょうか。そういう方たちにこそ、気づいて欲しいのです。我々の宇宙を取り巻くこの真実に。

今、巷では精神世界に興味を持つ人々を中心にアセンション（次元上昇）という言葉がよく囁かれます。地球全体が靈的な変化を遂げ、その変化に上手く対応できた人々は靈的に上昇し、もって生まれた自分の使命に沿った豊かな人生が展開するという考えです。同時に昨年（2020年）末辺りから地球は魚座の時代から水瓶座の時代へ移行し、魂の声に耳を澄ませて生きる人達は、より軽やかに自由に自分を表現できるようになる、とも言われます。そのように言われる根拠は、敢えてここでは記しません。今の常識で捉えれば、それは荒唐無稽なおとぎ話です。一笑に付されることでしょう。しかし、私は敢えてここで断言します。今、私たちに「魂の次元上昇」が必要なのだと。その時期を迎えているのだ、と。繰り返しになりますが、本書はできるだけ分かり易く「靈性」を解説しました。その発信対象は、この世界の大多数を占める「常識」から離れられない人々です。今、私たちは、発想の大転換。魂の次元上昇が求めら

れています。自分自身も含め、靈性の本質を理解し、この次元上昇に乗り遅れないために本書を記しました。多くの人達が持つ「常識」と言う眼鏡の曇りを拭い去るうえで、本書が少しでも役に立てば幸いです。